法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-05

哲学閑話(その1)

関口, 和男 / SEKIGUCHI, Kazuo

(出版者 / Publisher)
法政大学人間環境学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
人間環境論集 / 人間環境論集
(巻 / Volume)
15
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
141
(終了ページ / End Page)
156
(発行年 / Year)
2015-03

Hosei University Repository

哲学閑話　その1

関口　和男

はじめに

「哲学」（philosophy）と聞いて、みなさんはどんなイメージを抱くでしょうか。

難解、屁理屈、非実用的、虚学など、お世辞にもよいとは言えないことばかりで、大抵の人は口では「哲学」の大切さを唱えながら、いざとなると、小難しくて面倒くさいのでできることなら忌避したいと思うのではないでしょうか。哲学の必要性は、とくに評論家がよくいうことですが、どのように必要なのかについては、不明のままです。要は、現実の生活にはなんの役も立たず、金儲けにもならず、難しい言葉をいじくりまわすだけのものということになるのであれば、考えないことにしょう、ということです。

しかし他方、そのような批評を浴びせられる自称哲学者 (実態は哲学文献研究者) 側も、或る意味では、ほくそ笑んでいるのかもしれません。哲学についての上記のような理解のもとでは、自分は周りの有象無象とは違うという自己愛的なエリート的雰囲気を十分に味わえるからです。これはなにも哲学研究を職業として携わる人すべてを中傷して言っているのではありません。ただこのような傾向が、わたしの乏しい経験から感じ取れるだけなのです。とはいえ、今日の倫理的関心が哲学という学問の大枠の中にあるとするならば、職業的行為である「哲学する」ということと「わたしはいかに生きるべきか」という処世観とが、同一人格の中で、ものの見事に乖離している哲学（研究）者が多すぎるように思われるのは、いったいどうしたことでしょう。

まぁ、この話は、また別の機会に述べるとして、本題に戻りましょう。

Hosei University Repository

さて、「哲学」とは、その語源からして「愛知」すなわち「知 (知ること) や叡智を愛すること、したがって物事の本質などをとことん知ろうとすること」と、多くの人が習うはずです。わたしも、そのように習ってきましたが、よくよく考えてみると、それらが具体的に何を言いたいのか、さっぱりわからないのです。むしろ、その「愛知」という表現に、なにか空々しいものを感じてさえきました。というのも、鉄の嵐が吹き荒れ、無数のいのちがいとも簡単に朝露のごとく消えていった二十世紀を経験した人類の一員として、「愛」ということばのどうしようもない軽さが心の片隅によどんでいるからなのです。そんな大げさなことでなく、むしろ、愛ということばとその響きがストレートにわたしの心に伝わらないからかもしれません。

しかしまた、とくに「物事の本質を究める」のが哲学であるとするならば、今日のあらゆる学問が哲学となってしまうでしょう。そこで、哲学が職業的学問の一分野をなすために、その学問の研究対象が、次第にせばめられて、存在や生、理性、共同体などとなっていかざるを得なくなったとも言えます。哲学という学問について考えれば考えるほど、このように簡単にはわからなくなることこそが、「哲学」を難解な学問と位置づけているのかもしれません。とはいえ、哲学史をじっくりひもといてみると、「哲学」はそう捨てたものでないことがわかります。古代ギリシア哲学の発端に位置する哲学者タレスについて、面白い逸話が残っているようですので紹介しましょう。

ある日、タレスが思索しながら町の通りを歩いていた時、誤って側溝に落ちてしまいました。それを見た人々は、彼を、「考えに夢中になって自分の足元さえ気づかない現実離れ」のバカ者として大笑いしたそうです。ところが、彼が考えていたことは、来年のオリーブの収穫量は今年に比べてどうなのかということだったらしいのです。彼は、どのような理由からかわかりませんが、周辺のオリーブ搾油場を一手に借り受け、翌年には、オリーブ油を販売して大もうけしたらしいのです。おそらく彼は、今でいう経済や農業、はては気象や交易をも考慮して、多角的に一つの事象を注視することができたのでしょう。

この逸話は、「考えること（思索）を楽しむ」ことは、あらゆる分野や活動に大いに役立つことを示しています。思索する・思惟するとは、人間の本質や自然の法則などを追求することであり、決して狭い学的な対象のみに関わるのではないのです。

野暮な言い方をすれば、「お金を儲けたければ哲学すること（考えること）を

Hosei University Repository

学びなさい」ということにもなるでしょうか。こういうと、哲学の品性を貶めるとお叱りを受けるかもしれませんが、ひょっとすると、上述のようなところに、哲学という学問の本来の在り方があるのかもしれません。

まぁ、このようなことはさておいて、今回は、哲学そのものや哲学という学問の対象について真正面から取り上げるというよりか、むしろその対象にどのようにわたしたちはかかわっていくのかを、「哲学」の周りから考えていきたいと思います。なお、以下の拙論は、通常の意味での学術論文では毛頭なく、あえて言えば、哲学的雑談とでも考えていただければ幸いです。

第1話　驚き

さて、イオニア自然哲学を淵源とする古代ギリシア哲学は、驚きと好奇心とから始まったといわれます。しかし、よくよく考えてみると、驚きや好奇心という行為や感情（？）はいったいどういうものなのかよくわかりません。世間には、誰もがわかっているようで、ふと立ち止まっていざ考えてみると、何が何だかわからないということが数多く存在するようです。この、驚きや好奇心という行為や感情も、わたしには、そのようなもののように思われて仕方ありません。しかし、だからといって不明のままでは、なにかどこかで忘れ物をしてきたようでなんとも落ち着きませんので、些細なことかもしれないですが、以下では、それらが何か、少しでも考えてみたいと思います。

まずは驚きについて、卑近な例から探ってみましょう。

A．暗い夜道でだれかがわたしのうしろに忍び足で近づいてきて、「わぁ！」と大声で突然叫んだとしましょう。わたしでなくとも、誰でもがきっと声をあげて「驚く」でしょう。

B．また、旅に出て、甌穴のある渓谷沿いの川に立ち寄って、その川底にできている甌穴とその中の石の形状がほぼ完全な球形であることを見たとき、、きっと「驚く」でしょう。

ではまず、この二つの例が示す「驚き」にはどのような違いがあるのか、探ってみましょう。

前者Aは、わたしが、人の気配をまったく感じていない状況の中で、人の存在を直接に近くで感じたときの、いわば「突然の予期しないびっくり」感であると

Hosei University Repository

いえましょう。言い換えるならば、予想だにしないものとの瞬時の遭遇、これが前者の「驚き」なのです。

この驚きの特徴は、今風の表現を用いれば、持続可能性を属性としない瞬時の感覚である、ということです。というのも、わたしの置かれている状況をわたし自身がわたしなりに了解すれば、先の不可解な状況は、わたしにとってのありふれた日常的な環境へと一瞬のうちに変容してしまうからです。声を挙げたのがだれで、なぜなのかがすぐにわかります。要するに、お化け屋敷の「びっくり」体験に似ています。

他方、後者Ｂの場合は、対象によって自分の五感 (ここでは眼) が、ガッチリとからめとられ、そこに今までに経験したことのない事象を見出だして、「驚く」という感覚です。これは、言うなれば、「感嘆」の情に近いといえましょう。大げさに言えば、宗教哲学者Ｒ．オットーの指摘する「ヌミノーゼ」の類かもしれません。それはまた、若き日の版画家棟方志功が名もない雑草の花が放つ美しさに「驚き」、美を追求する画家を志したことにもみられるものです。すなわち、これらの場合の「驚き」は、対象がわたしをがんじがらめにしてわたしの心を一定時間占拠し続けてしまう持続可能性を秘めているのです。

このように、驚きは、単なる「びっくり、どっきり」だけでは瞬時の体験に終わってしまいます。驚きが高揚した感情である以上、かならず醒めて消滅するものです。しかし、それは、次の段階の持続的な「好奇心」すなわち「どうして？」に連なっていく可能性を伴っています。

では、どうしたら、「好奇心」につながる「驚き」は、可能となるのでしょうか。

そのために、先に挙げた二つの例を再度考えてみましょう。

後ろから声をかけられてびっくりする「驚き」の場合Ａは、自分の予想する状況が瞬時に否定され、次の瞬間、自分の置かれている新たな状況を了解するというステップを踏みます。ここでの了解行為は、「自分なりに納得する」という意味で、いったん納得してしまえば、人間の欲望の充足と同様に、その驚きは、消えうせてしまい、後日の話の種になるくらいで済んでしまいます。では、なぜ納得してしまうのでしょうか。

それは、すでに述べたように、真後ろから大きな声がするという異常な状況で、わたしが振り向いたり、声の主が姿を現したりする行為によって、そのような非日常的な状況の真実が暴露され、非日常性が瞬時に雲散霧消して、日常的な

Hosei University Repository

状況が回復されるからです。水面に現れては、瞬く間に消えて痕跡を残さないひとつひとつの泡に似ているといえましょう。歴史的空間的かつ社会的な諸要素とわたしたちひとり一人が有する諸条件からなる日常性は、わたしたちが非日常的体験とみなすものをことごとく普段の経験の中に解消してしまう威力をもっています。

他方、甌穴の球状とその中の球形状の石の場合Ｂは、どうでしょうか。

まずは、今まで見たことがないので「びっくり」します。しかしその「びっくり」感は、その状況自体が存続し続けるために、瞬時に消えることなく、何なのか、なぜ、どうして、という懐疑へとわたしを誘導する力をもっています。これはいったいどういうことなのでしょうか。

自分の経験や体験からすれば、あってはならないもの、あるはずのないものが目の前にあり続けています。川底の石は、上流ではごつごつして角張っており、下流では、流れの中でその角が摩耗して、楕円形などのようなさまざまな形になっています。学校では、理科の時間にそのように教わりました。

このような経験則から外れた事態に直面して、もはや先の「驚き」の感情は雲散霧消し、「その球形の穴とそのなかにある石を対象物として我を忘れてじっと見つめている」。この、「注視」という積極的な行為と、先に挙げた対象にからめとられるという状況、言い換えれば対象に魅了されるということが、驚きと好奇心をつなぐ結節点となっているのです。もちろん、ここから、「なぜ、どうして？」という思いに駆られて、「なぜなのかもっと知りたい」という気持ち、好奇心（いわゆる知的好奇心）という探究への端緒となる人間的行為が始まるのです。

第２話　　好奇心

では、この好奇心とはいったいどのような感情ないし欲求なのでしょうか。

まずは、「このケーキおいしいのでもっと食べたい」という場合の食欲という欲求から考えてみましょう。

「もっと食べたい、もっといっぱい味わいたい」などの欲求は、その欲求の充足を積極的に追求するものですが、「なぜ、もっとほしいのか？」という思いを必ずしも必要とはしません。というのも、「できれば、なんとしてももっと食べたい」と願う積極的な欲求だけに過ぎないからです。とはいえ、そこには明らか

Hosei University Repository

に、時間的な持続性が伴います。食べたケーキがもう手元にはないので、それを再び買いに行く、などの場合がそれにあたります。

では、食欲という欲求と好奇心という欲求（？）はどこが違うのでしょうか。

両者に共通するのは、対象に対する積極性と瞬時ではないという意味での持続性です。とするならば、その違いを明らかにするには、何が対象となるのか、どのような積極性なのか、ということではなく、その持続性を支えるものに注目する必要があるでしょう。食欲の場合は、食べて欲求を満たしたいという衝動ですが、好奇心の場合には、「なぜ？」という思いに基づく妄想や空想が重要な契機となっています。ところで、この段階では、好奇心一般には、かならずしも倫理的価値観は付随しません。すなわち、善悪がないのです。他者から見てとんでもない好奇心を抱いていると思われる人がいるのは、このためです。好奇心と倫理的価値判断は、本来、領域を異にするのです。

しかし、それが倫理的価値判断の俎上に載せられたとたんに、学問にとって重要な空想（ファンタジー）も有害なものとみなされたり、好奇心・探究心それ自体もフェティシズム的性向として片づけられ抑圧されることも、社会の中では起こりえます。変人や狂人と呼ばれたひとが歴史上多くいるのは事実です。ただ、ニーチェが指摘するように、好奇心や探究心は、深淵を覗き込むという行為と同じで、かえって深淵に魅せられてしまう場合もあります。それは、好奇心が、或る特定の対象に対する積極的な精神の働きそのものであり、その本性上、時間や空間を条件とするさまざまな倫理的道徳的規範に全く縛られていないからです。

さて、このような好奇心に基づく行為は、時間的なスパンがあるために、観察や実験など、探求のためのさまざまな行為が介在してきます。

わざわざ川の中に入って、甌穴と甌穴の球形を手でじかに確認し、さらにそのなかの球形の小石を取り出す行為、それを、あらゆる角度から観察する行為。そしてこれらの観察行為の後に、推理が行われるのです。そして、その推理が正しいかどうか、検証を行い、最後に一応の結論が下されます。この過程は、短時間の場合もあるし、その人の一生にわたる場合もあります。

そこで、以下では、知的好奇心に秘められた快楽（知る喜び）が深くかかわる事例をいくつか挙げて、知的好奇心のもつ、いわば精神の駆動力（知的快楽）を明らかにしてみましょう。

事例１　【文字と文明】

「歴史はシュメールに始まる」と言われるシュメール文明は、或る意味では驚

Hosei University Repository

くべき文明を一瞬のうちに開花させ、古代メソポタミアの世界に大きな影響を与えたといわれています。この文明の起源やそれを担ったシュメール人の出自は謎に満ち、考古学から雑誌『ムー』のようなオカルト本まで、さまざまな領域で多くの仮説を生み出してきたのは、ご存じのとおりです。

ここでは、楔形文字の発明と商業・交易の発展との関係に絞って話を進めていきましょう。

わたしたちは、文字と商業・交易の発展との関係をまったく当たり前のこととして前提とします。しかし、ここで、その当たり前のことについて考えて、次のように問うてみましょう。「文字の発明は、商業・交易の発展とどのように具体的にかかわっているのか？」

おそらく多くの人は、「文字のおかげで、人間のあやふやな記憶に頼らずに、誰でもが客観的に認識できる契約文書が作成できるようになり、それらを取り交わすことによって商業・交易が飛躍的に発展したから。」というでしょう。しかし、これで納得してはいけません。これは、知的好奇心への入り口に過ぎない大変優等生的な答えで、或る意味、結果論的な感じがします。しかし、問題は、そんなに簡単なことを聞いているのでしょうか。もちろんこの答は間違っていないでしょうが、何かがどうも変なのです。

では、変な感じはどこから来るのでしょうか、調べてみましょう。「どうして」のはじまりです。

まず、楔形文字は、どこに書かれたのでしょうか。もちろん、パピルスや羊皮紙ではありえません。それは、粘土板なのです。これらは、世界史の教科書によく写真掲載されているからおわかりでしょう。このような粘土板は、ウルやウルクなど古代メソポタミアの都市国家の王宮などから多く発掘されています。このことから、楔形文字は粘土板に書かれたという事実が理解できます。

実はこれでおしまいではないのです。単純なことですが、粘土板とはどのようなものか、考えてみましょう。確かに、文字は粘土板に刻みやすい。しかし、乾くと脆く、しかも厚みがあって重い。

ではここで、想像してみましょう。このような粘土板を何枚もラクダに背負わせて、砂漠を行き来することの困難さは、きっと想像を絶することでしょう。昼夜の寒暖の差が激しいために、粘土板にひびが入ったり欠けたり、要するに、粘土板自体の取り扱いが難しいために、移動可能な記録媒体としての利用効率は、さほど良くはないのです。

Hosei University Repository

もしあなたが交易商人だとしたら、このような扱いづらいものを積極的に用いるでしょうか。とはいえ、シュメール文明の都市国家群は、交易を飛躍的に拡大させ、富を蓄積したという、歴史的事実を示しています。では、このことを、どのように理解したらよいのでしょうか。

一般に、文字の発明が、文明の誕生と展開において果たした意義が強調されます。文字は、人間の記憶と異なり、瞬時に雲散霧消したり、あやふやになりがちな人間の思いや考えを、持続的にまた第三者がいつでも確認できるように保存することができます。この点において、文字の発明は、画期的と言えます。

しかし、問題はそれだけでしょうか。もう少し深く考えてみましょう。

楔形文字の書かれた粘土板については、先ほど述べましたが、交易においては、文字の記録媒体こそ、本質的な重要性を持つのではないでしょうか。言い換えるならば、シュメール文明を支えた文字の記録媒体はなんであったのかということとなります。

そう、シュメール人は、画期的な記録媒体を発明したのです。しかも、それは、驚くことに、今日でもわたしたちが日常生活でよく用いているものなのです。それは、円筒印章と呼ばれるものです。簡単に言えば、印鑑です。印鑑といえば、今日、円筒形のその円形の断面に名前や社名などを刻んだものですが、シュメールの印章は、わたしたちが印鑑を使用する際に持つときの、その側面を利用して、びっしりと楔形文字を刻みこんだのです。

ということは、誰でもができる技ではないので、その技に特化した術をマスターする人々、それからそれを教える学校のような組織があったはずです。じじつ、考古学の発掘は、そのような遺跡を明らかにしています。なんのことはない、今日、コンピュータの技能を習得して資格を取るために、専門学校へ通い、その後事務員として職場で働くようなものです。

このような驚くべき発想を、シュメール人はどこから得たのか、この疑問は、もはや、『ムー』の世界でしかありません。というのも、これについては、なんの考古学的事実も現代のわたしたちは手にしてないからです。

事例２　【体温計にみる数学の役割】

現代のわたしたちが享受している技術文明は、たかだかこの数百年間の発展にもかかわらず、飛行機・ロケット・高速鉄道・コンピュータなど驚くべき人工物を生み出してきました。人類史上かつてないこのような急激な技術的な進歩は、何によってどのようにしてもたらされたのでしょうか。

Hosei University Repository

誰しもが抱くこの素朴な疑問に、ヨーロッパにおける科学革命の存在を指摘する人が多いでしょう。ガリレオ・コペルニクス・ケプラーなどの著名人の名前がすぐに脳裏に浮かんできます。彼らが数字と数式を用いて宇宙の解明に向かった時から、数学が科学革命以降の世界で巨大な役割を果たすことになったのです。それは、教科書的な表現を借りれば、宇宙や世界についての形而上学的議論から、実験と観察へ、そして記号と数式による記述へということになります。

では、これらのことによって、わたしたちは具体的に何を理解できるのでしょうか。

おそらく、わたしのような門外漢は、「あぁ、そうですか、数学はすごいですね」で終わってしまうでしょう。少しでもこの分野に明るい人ならば、「中世までの実体論的なアプローチが、数学の発展によって、関係論的なアプローチに変わったんだよ」というでしょう。しかし、よくよく考えると、「このことは、さらに具体的には何を意味しているのか？」という問いを発せざるを得ないのです。というのも、事象Ａと事象Ｂとがかかわっているとは、どういうことなのか、明らかにされないままだからです。

では、この疑問について、最も卑近な例をもって考えてみましょう。

あなたは、今、身体がけだるく熱ぽいことを自覚し、クリニックに行くことに決めました。クリニックの先生は、あなたに簡単な問診をした後、熱がどのくらいあるか診るために、体温計であなたの体温を測ることになるでしょう。しばらく時間がたってから、先生は、体温計を取り出して、(渋い顔をしながら) あなたに、「熱がありますね、38,5 度です」と告げます。すると、あなたは、自分が高熱を発していること、ひょっとすると何らかの病気にかかっていることを悟って、不安になります。

さて、この光景は、あまりにも日常的すぎて、誰もここに現代技術文明を支えている重要な契機が潜んでいることに気付かないでしょう。

では、その重要なこととはなんなのでしょうか。

あなたに熱がありそうだということは、あなた自身の自覚ですから否定しようもありません。さて、体温計のほうはというと、温まると水銀やアルコールがその熱膨張で、管の中で膨張し、上面が徐々に上がっていきます。これは、熱のあるところではどこでも起こりうる客観的な事実であり否定しようがありません。また、「熱がある」というあなたの主観的な感覚・知覚と、液体の熱膨張という自然科学的な事実それ自体には、まったく何の関係もありません。

Hosei University Repository

しかしここで、或る条件下での液体の熱膨張の一定の度合いを、たとえば１０と定め、その同じ条件下での人間の体温を２０と定め、さらに他の条件下でも同じようなことをすれば、人間の体温そのものが、客観的な事実として測定可能となります。すなわち、何の関係もなかったふたつの事象が、数字と数式によって、関数的に関係づけられたことになります。

この関数的な発想は、人間が行う観測・実験や、工作物の制作などに決定的な重要性をもたらしました。すなわち、あらゆるものが、相互に関係づけられる状況が出現したのです。あらゆる物事を関係づける手段を自由に操作することができたということが、現代技術文明を支える一つの大きな原因かもしれません。

このような事例からわかるように、個々の断片的な知識の単なる集積は、新しい状況を生み出しません。それは、物知りの段階です。それらの単なる知識を、疑問と批判という作業を通して結び付け、関連付けて新たな価値を創造する力が必要となるのです。

第３話　　ことば

「ことば」そのものについて哲学的に何かを語ろうとする場合、「ことばとはなにか」という本質論的な問いは避けられないかもしれません。しかし、この問い自体は、小生の力ではどうしようもないので、それは言語哲学者などの専門家に任せて、ここでは、日常あまり気にすることなく使用している「ことば」というものが、どんな問題をはらんでいるのか、について素人なりに考えてみたいと思います。

たとえば、日本語（本稿では、「ことば」」の例として日本語を考える）は主観言語であり、それに対して欧米諸語は客観言語であるとよくいわれます。それはおそらく、文の構造での要素の在り方に注目し、文の的確さ、すなわち発話者の意図が正確に聞き手に伝わるかどうか、ということを主眼におくアプローチから得られるひとつの見解でしょう。このことからすると、日本語は主観言語そのものであり、理性よりか感性に重きを置く人間の主観性を表現するのに適した言語である以上、発話者と聞き手の間柄が非常に近しい状況では、たとえ文の基本要素が省かれるとしても、文意が伝わるという点では何ら支障がないということになります。「春はあけぼの」「おぉい、お茶！」などはその典型であり、そのこと

Hosei University Repository

によってむしろ、話者と聞き手の間柄の近しさや親しさが、彷彿として目に浮かんでくるのです。

他方、"I love you." のような欧米語の文の場合、たとえば、"I you." は、何の意味を持たず、したがって、聞き手には何のことやら皆目わからない文となってしまいます。したがって、文の基本要素は、意味そのものを命題が担うために欠かせないもとなり、客観言語といわれるゆえんなのです。

問題は、このようなことから、客観言語は、主観言語よりさまざまな事象の記述に適している正確な言語であると、思い込んでしまうことです。もちろん、自然現象を学術的に記述するには、あいまいさが許されませんので、当たり前な話です。ここにも、ことばによるコミュニケーションとは何か、それは何を志向するのか、という大きな問題が浮かび上がってきます。

しかし、ことばについては、以上の問題だけではありません。

ことばの使用だけではなく、「ことば」そのものをどのようにみるかという、大きな問題があります。

そもそも、ことばについての評価は、洋の東西では大きく異なります。

ヘレニズムとヘブライズム、さらには古代エジプトの神学は、ことばに関しては、ほぼ同じ姿勢を持っています。それを一言でいえば、「ことばへの絶対的な信頼」となります。メンフィス神学・旧約聖書創世記・ソクラテスの対話術・アリストテレス論理学などが具体的な例です。しかし他方、東洋、とくに古代インドの初期仏教（北伝仏教）では、それらとは真逆で、すでに「ことばへの不信」を表明しているのです。

たとえば、一時期ブームになった一般向けの哲学的啓蒙書ともいえる『ソフィーの世界』は、「わたしとは何か」がメインテーマでした。そこでは、すでに常に、「本当のわたし」が無批判的に前提にされています。とすると、「今のわたしは、本当のわたしではない」とする反省的な意識は、必然的に本当の自分探しの旅へとわたしをいざないます。または、本当の自分になるために、克己努力して自己実現を達成しようとします。おおざっぱに言えば、進歩史観も義務教育観もさらには政治的世界観もすべて、[本質―現象] の図式を表しているといえるでしょう。今日の社会に暮らすわたしたちが、日常当たり前に耳にする「本当の家族の在り方」「本当の愛」などの表現は、この事態を端的に表明しているのです。

では、初期仏教で表明された「ことばへの不信」とはなんなのでしょうか。

仏典『ミリンダ王の問い』は、ミリンダ王（メナンドロス王）と仏教の長老で

Hosei University Repository

あるナーガセーナの問答集ですが、それは、かつてヘレニズムと仏教思想が真正面から思想的にぶつかった極めて異例かつ貴重な歴史的事実を今日に伝えています。

そこでは、先ほどの例でいうならば、「わたしとはなにか」という問題が次のようにして語られていきます。

「よくいらっしゃいました、ナーガセーナ長老様」「いま、王様がおっしゃったナーガセーナとはなんですか」「頭がそうでしょうか、手がそうでしょうか、足がそうでしょうか」云々。

これは「わたしとはなにか」という本質や実体に関するヘレニズム的な問いが前提とする「わたし」の実在そのものを否定しようとしているのです。すなわち、ことばには、その本性上、事柄を実体化・物化する性質がありますが、その点についてはっきりと異議を唱えているのです。

これらの歴史的な事実は、わたしたち日本人が、明治以来の西洋的な近代化の過程で、至極当然のこと、当たり前のこととして受け入れられてきた「ことば」の機能を、批判的な観点から見直さなくてはならないことを示唆しているように思われます。どんなにグローバル化が叫ばれようと、東西の思惟構造の根本的な相違いは、俳句の英訳にわたしたちが素朴な違和感を抱くように、なくなりようがないからです。このことは、西洋人にとっては、けっして俳句は理解できないということを言おうとしているのではありません。それは、たとえ俳句が文字で表象されようとも、感性の問題であって、理性の問題ではないからです。

基本的な話はこのくらいにして、つぎに、「ことば」そのものについて、とくに「ある」を考えてみましょう。

最近の大きな話題といえば、stap 細胞事件がありました。さまざまな報道や議論がなされましたが、結局は、「stap 細胞は、いったい、あるのか、ないのか」という問題に収斂していきました。この事件は、理化学研究所という組織問題も絡めて耳目を集めるところとなり、今現在でも決着がついてないと信じている人が大勢います。しかし、自然科学的には、実証・検証・再現可能をもって或るものの「ある」を確定するということになっています。これは、いわば約束事です。この点について、現代の科学的知見では「ない」かもしれないが、本当は「ある」かも知れないのではないかという意見がよく提起されますが、これほど無茶苦茶な意見はありません。それを認めれば、何でもあり、になってしまいます。将来、河童にも会えるかもしれません。これは、疑似科学の領域です。わたしたちが扱

Hosei University Repository

う自然科学の領域での「ある」は、厳密さを旨とするのです。しかし、日常生活では、時として、「ある」は、おおざっぱに使用されます。潤滑油としての言葉の妙味といえましょう。たとえば、「UFO は存在する！」などはその典型で、夢を与えてくれますが、その実在を立証する写真がどれもピンボケなのはどうしたことでしょうか。「ある」があいまいで、それを立証する写真がまたピンボケでは話になりません。さて、本筋に戻って、「ある」を考えてみましょう。

今日に至るまで、「存在」ということばは、周知のように、eon/ousia/esse/sein/etre/be の漢訳語で、「有・ある」と理解されています。すなわち、「存在とはなにか」ということは、「あるとは何か」ということとなるわけです。この「あるとは何か」という問いをめぐって、洋の東西を問わず、多くの哲学者や哲学研究者が頭を悩ませてきているのです。

では、なぜこのことが悩みの種となるのでしょうか。まずは、存在という漢語について考えてみましょう。

周知のように、日本人は、通常、「Xがある」とか「Xがいる」とかいう表現の使い分けによって、「存在」を表象しています。とするならば、いかに上記の欧米語を「存在」という漢語に置き換えようが、極端な言い方をすれば、縦のものを横にしただけの単なる言いかえに過ぎず、日本的な日常的な思惟構造にはすんなりと適合しないのではないかと思われます。

では、西洋的な「ある」思考と日本的な「ある・いる」思考とはどのように異なっているのでしょうか。以下ではこの点について考えていきましょう。

「ある」思考は、あらゆるものを「ある (存在)」か「ない (無)」かの二分法で了解しようとします。ここには「なる」(生成消滅・変化) の入る余地がありません。もちろん、「ある」に「いる・なる」が含意されているとしても、言語として明瞭に識別されて使用していない以上、それを「ある」ということばのみによって積極的に了解することは困難でしょう。また、漢語の場合、有・存・在で微妙な差異が見て取れます。有・存は、欧米諸語の「ある」に近く、在は、「いる・住まう」を意味しています。しかも、『易経』によれば、陰陽説は、「ある」よりか「なる」の観点から説かれているといえます。すなわち、陽から陰へ、陰から陽への変化のうちに、人間事象をも含めた森羅万象のすがたが、描かれるのです。

では、この、東西の違いは、どこから来るのでしょうか。

もちろん、古代ギリシア人も中国人も、日本人も、生活する・生活している、という事実では全く変わりがありません。とするならば、おなかがすいたら何か

Hosei University Repository

を食べ、寒くなったら何かをまとい、雨が降ってきたら雨のかからない処に行こうとするような同じような行動形態をとっているそれら三者にとって、何が違っているのでしょうか。

おおざっぱに言えば、それはおそらく、日常生活の根底にある、あらゆる事象を捉える、その捉え方が根本的に違っているのではないでしょうか。（わたしは、それを「仮想実在性」と呼んでいますが、その説明は、ここでは省略します。）とするならば、一つの同じ事象を三者三様にとらえているということとなります。仮に、古代ギリシア人と中国人さらに日本人が、同じ浜辺で同じ夕陽を見ている姿を想像してください。おそらく、三者は、美しさへの感動は別として、同じ浜辺、同じ夕陽ではなく、異なった浜辺に立って異なった夕陽をじっと見ているのです。そうです、浜辺と夕陽は三組「ある」のです。

ヘレニズム的思考法では、本源（アルケー）から現れ出る本質 (実体) とその現れである現象という思惟装置を大前提として、それらを的確にことばによって表象できることへの絶対的信頼が揺るがないのであり、ことばによる思考を戯論とする東洋思想 (とくに中観) とは全く趣を異にするのです。しかし、このヘレニズム的思考法は、ヘブライズムでもほぼ同様であり、ことばやロゴスへの信頼は揺ぎません。むしろ、ことばと存在の一致、言い換えれば、ことばの真理性・実体性が否定されるならば、そもそも実在する超越者の絶対性と万能性を説くヘブライズムは成立しえないのです。

このように、ことばとは、本当に難しいやっかいなものであり、それゆえに、そのことばのやっかいさを補うものとして、発話者と聞き手との双方向的な多様な交通すなわちコミュニケーションが人間生活に不可欠なものとなるのではないでしょうか。とくにそれは、面と向かった発声の大切さを明らかにしています。ことばは、人間にとって、みずからの意思を伝えるこの上なく便利なツールですが、ことばが本来持つ厄介さやあいまいさを忘れ去った時には、大げさに言えば、世界や世間を忘却しきった孤立状態を一人ひとりがほろ苦い孤立感を味わいながら生活することとなるでしょう。情報端末機がこれほどまでに発達した大衆社会に生きるわたしたちにとって、分断と孤立は避けがたいものとなるに違いありません。

まずは、「哲学する」際には、そのことを十分に心得ていなくてはならないでしょう。

Hosei University Repository

おわりに

「考える」ことを身につけるとは、どんな事でも疑うこととなり、結果として、身動きできなくなる自縄自縛の状態を生む、と言われます。「考える」ことを好む傾向の強い人は、何も具体的な行動を起こさないで文句ばかりを言いたがる天邪鬼とか、皮肉屋とかいわれるのが関の山で、ひどい場合には、協調性のまったくない奇人変人と陰口をたたかれます。

確かに、今の世の中、体験や実習がもてはやされ、「理論から実践へ」が、色々の分野での合言葉になっているようです。しかし、「理論と実践」は、近現代の学問論の主要課題の一つで、そのあるべき関係などが多く論じられてきました。詳細はさておき問題とすべきは、どちらが優先するかということではなく、両者の本性を明らかにしてそのバランスをいかにとるかでしょう。実験や観察といえども、前もっての理論的で地道な作業と仮説がなければ、厳密には何の役にも立たないのは当たり前のことですから。

しかし、この両者をバランスよく保持しようとすることは、学問の細分化と専門化が極端に進んでいる今日、難しくなっています。となれば、餅は餅屋、それぞれの長所を生かした有機的で積極的な研究体制が構築されれば、それに越したことはありません。

しかし、悲しいかな、人間はどうもそのようなシステムにすんなりと適応できるようには造られていないようです。はっきり言えば、自分と違う研究方法や意見を受け入れるほどの器量を、わたしを含めて、ほとんどのひとは本性上持ち合わせていないのでしょう。

最近、竹岡俊樹著『考古学崩壊―前期旧石器遺跡捏造事件の深層―』（勉誠出版、2014/9）なる本が世に出ました。その内容については、立場上賛否両論があろうかと思いますが、前期旧石器の捏造を告発した研究者 (竹岡氏) の見解を頭から排除することなく、少しでも学会が彼の意見に耳を傾けていれば、あのようなとんでもない捏造行為とその後の考古学の長期間にわたる地盤沈下は、防げたかもしれません。「たら・れば」の話ですが、本当に口惜しいことです。

要するに、今の世の中 (特にさまざまな学会など) は、異質を極端に嫌い排除しようとします。確かに、トンデモ本に出てくるようないかがわしい連中の意見や紛らわしい話もありますが、それらはかならず自然に淘汰されていくものです。「人間的に問題があるから、あいつの話は一切聞かない」では、ポアンカレの難

Hosei University Repository

問も永久に解決されなかったことでしょう。

問題は、さまざまな学問研究集団が、権威第一主義と成果主義、損得勘定に走ってしまっていることです。

そのようなところでは、研究のコラボとは、結局は、気が合って同じような研究傾向を有する研究者のお友達仲間が集まってのことであり、そこでは、真正面からの議論は不可能で、お互い傷つけあわないように、遠慮とよいしょ、親分子分の関係と同調しかありません。残念なことですが、これが、私の経験した周囲の状況です。

まぁ、こんな暗いことばかりでは気が滅入ってしまいますので、最後に気持ちの良い話をしましょう。

確かに、今の若い人たちの多くは、考えるだけの地味な作業を極端に嫌がります。しかし、そうはいってもすべてのひとがそうではありません。たとえ、ほんのわずかでも、「考えることの苦しさと楽しさ」「難しいことが氷解した時に味わう知的喜び」を求めている人たちが、かならずいます。その人たちの将来に期待して、日々を過ごすこともまた、共に学ぶ者にとっては、大いなる喜びなのではないでしょうか。